
昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昏い道連れ

【Nコード】

N4558Y

【作者名】

洸海

【あらすじ】

妖退治を生業とする流れ者の雷火は、雨宿りに選んだ木陰で一人の少年と出会う。神官戦士になるために必要な「しるし」探しの途中だという彼と、ひとまず共に行くことにする雷火。だが少年の背後には、ひっそりとして来る不吉な昏い影があった。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ有。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベルです。

一 兩宿り(1) (前書き)

上代と室町だか江戸だかをごっちゃにしたような、なんちゃってジヤパニーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてご覧下さい。

一 雨宿り(1)

—

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからつてもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稲妻の光は、他のどんなものより格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜ける。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかって、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりドザーッと来られた日には、まったく！

「くそつたれ！」

文句のひとつも言いたくなるつてもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしょうめ。

右にも左にも、人家はまったく見当たらなかった。うち捨てられて荒れ放題の畑、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂った湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言ったのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へった。

手の甲で何度も目を拭ったが、後から後から滝のように雨水がしったり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か あるいは

『何か』　　がいるとは思わず、やれ助かったと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ目にあつたぜ」

ぷう、と息をつくくと、水しびきが散つた。いやもう、頭のとっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいとこだ。どつからどこまでが自分の体で、着物で、草鞋わらじなんだか、わかりやしねえ。目ん玉まで流れちまってやしねえだろうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何か息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待ってましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……

「つて、なんだオイ」

構えた刃を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらった。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真つ黒の犬っころだったのだ。子犬と言うにはでかいが、まだ成犬おとなじゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこつちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじゃねえよ、わんころが。腹がへってんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありゃ、自分で食ってるよ」

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持ってねえつつつてんだろ。シツシツ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こும்まとわりつかれちゃ、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引つ搔きやがった。

「ええい、食つちまうぞコラー！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻ってこい」

子供の声が言うのが、同時だった。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなって声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がり、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかった。白犬を連れ、白い着物の子供だ。見たところ十二歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそっちへ駆け戻って行った。小僧は黒犬の頭をちよつとなでてから、顔を上げてまっすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構ってくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやおっさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。見知らぬ餓鬼から小父おじさんなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳って分かんなくてさ。第一この天気での暗がりでの格好じゃ、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまった。確かに薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立ってたんじゃ、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束ってことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上についてちゃ、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作ったような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきゃいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄クロガネ、こっちの白いのは雪白ユキシロ。俺は真理シだよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて二匹の犬を眺めた。わんころなんざ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至っては真理サマと来る。ぺっぺっ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙ってるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかった」

けるりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきゃ、その呼び方はするんじゃない」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言うより、正しい呼び方だと思っけど」

きょんとした小僧の面を張り飛ばさなかったのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかったからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治するのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だって本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙ってる。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕っ節だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやってる、ってわけだ。飯の種をくれてやってんだ、ありがたく思え、ってな」

大体があのだ連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしゃがる。月華みたいな刀は妖を斬って穢れが溜まるから、時々神殿へ持って行って清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そうな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまって、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一 雨宿り(2)

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る
気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事さ」

ため息をつくとき、腹の中に残っていた最後の空気までなくなつた
ような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持っ
てねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとん
と腰を下ろす。ちえっ、本当にこの二匹の犬を食ってやれたらいい
んだがなあ。

と、小僧は何やらとこそそやって、胴乱たんらんから小さな物を取り出し
た。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛び
ついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何も無いよりはマシかとその木っ端を
受け取つてくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙
な味が染み出てくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく
飢えがおさまつたような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじっていると、
横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ
者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこつた」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖
退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ない
んだって。一匹二匹の小さな妖が悪さをしたからって、ちよつと行

って退治する、ってことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だっわけ」

小僧はそこまで言っつて、俺が聞いているかどうか確かめるように、こつちの顔を覗き込んだ。ちえっ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢ってのはこういうのを言うのかね。

「知ってる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士って人も結構いるんだよ」

「そいつぁ初耳だな」

俺は思わず本気で驚いてしまった。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃないやねえよ、ちくしょう。

俺は苦い顔で睨んでやったが、薄暗がりだから見えなかったらしい。小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になったのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行っちゃうんだっつてさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんざ、どいつもこいつもそつたれだ」

俺は言い捨てて、雨足の弱まってきた空を見上げた。さつきより明るくなってきたようだ。これなら、もうじき出発できるだろう。

今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかったせいか、ちよいとがっかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言っただけだっつてのに！ ああもう。

しょうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやった。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖
ばっかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどこかーんとでかく
て立派だから、神官の連中もお高くとまってやがるんだ」

「そうかもね」

小僧は言つて、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちよいとつまんで、
「これ、ありがとよ」

礼を言つてからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、
小僧が慌てて立ち上がり、二匹の犬とそろって俺を見上げた。おい、
まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちよつと待て、待てったら！ そんな目で俺を見るな
！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆った。冗談じゃねえ、てめえの飯もままなら
ねえつてのに、いきなり一人と二匹の食いぶちまで面倒見られるか
つてんだ。

苦悩する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待つてよ、俺まだ何も言つてないよ」

「言つたも同然だろうが、くそ、わんころまで一緒になって見つめ
やがつて！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじゃねえつつつてんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかった。ごめんごめん、なんて言いな
がら、小僧はけたけた笑つてやがる。

「はあ……まったく。あいな、俺はこれから豊平に行つて、周旋屋
で仕事もらつて、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだ
ぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくても、俺だつて妖退治に手を貸せるよ。こつ見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で二匹の犬を見やった。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を値踏みするような目付きをしゃがった。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしるおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、ご一緒するさ。けど、いいのか？ 何か探し物をしてるんだろ。念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になつてうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かっているわけじゃないから」

「……へえ？」

いったい何を探してるってんだ？ ちょいと気にはなるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろうし、俺の知ったこっちゃねえな。

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きます。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしっかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

(しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ)

俺は何も見なかったふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がり、うっそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙って見送り……それからゆっくり、後を追って動き出すのだ。

妖とは少し気配が違う。今のところ悪さをする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放っておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

(でなけりゃ、こいつの出番ってただけだ)

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈った。この刀であいつが斬れるかどうか、ちよいと自信がなかったからだ。

二 豊平村

二

豊平村はその名の通り、豊かな平地だ。田圃には稲が青々と茂り、構えのでかい家が続いている。村の中心部に近づくにつれて、街道沿いにちまちました家が増えてきた。里の者や旅人を相手にした、色々な店の並びだ。

俺の後ろを歩きながら、小僧は物珍しげに、やたらきよるきよるしている。まあ、あちこちに走ってつたり店先で騒いだりしねえだけ良しとするか……。里に入る前にあの影も薄くなつて消えちまつたようだし、贅沢言つてちやきりがねえ。

道に面した店はどれも、構えはそれなりだが、商いは田舎の里らしく地味なもんばかりだ。鑄掛屋だの荒物屋だの、茶店だの。もちろん旅籠もあるが、今の俺たちや文無しだ。ちえっ、早いとこ周旋屋を見付けねえとな。

「にぎやかな町だね」

ふいに小僧が言った。俺は振り返り、呆れ顔をする。

「深谷つてのはどんなド田舎だ？ 確かにここはそれなりの村じゃあるが、町なんて言えるもんじゃねえぞ。町つてのはな、もっと色々な店がうわーっと並んで、人通りもこんなもんじゃねえ。飯屋に煮売屋、小間物屋。職人だつて建具師に大工に庭師に細工師とわんさか住んでるもんだ」

「ふうん。想像つかないや。深谷はね、百姓と炭焼きと猟師ぐらいしかいなくて、神殿にも明師様と書士さんがいるだけだったんだ」
「ミヨウシ？ ああ、祭礼を司る神官だな。それと記録係のオマケつきか」

神殿てのは、神様を祀ってるだけじゃなく、里の住民の記録をつけてもいる。生まれた、死んだ、結婚した。そのいちいちに神殿が

絡むんだから、当然だつて言やあ当然だ。で、もちろんそういう事がある度に金がかかる。神官サマが帳簿までつけてたんじゃ、肝心の祭礼がおろそかになるつてんで、その仕事専門の下っ端がいるわけ。

「そんなド田舎じゃ、神官一人でも事足りるだろうに。金が余つてるんなら、俺によこせつてんだ」

「けっ、と俺が毒づくくと、小僧はこつちを見上げて、大人じみた苦笑を浮かべやがった。

「明師様はもうだいぶ、お年だったからね。書き物をするには目が不自由だったんだよ」

「おまえにやらせりゃ手習いにもなつて、一石二鳥じゃねえか。おつ、周旋屋の看板だ。やっと見付けたぞ。ちよつとでも前払いしてくれりゃいいんだがな」

「ごめんよ、と声をかけながら暖簾をくぐる。中には人つ子一人いなかった。ここが平和な里だつて証拠だな。こりゃ、仕事があるかどうか怪しいぞ。」

「誰かいねえのかい」

声を張り上げると、奥から「はいはい、ただ今」と男が一人、慌ててやって来た。血色のいいぼつちやりした丸顔の中年だ。何がなし気に食わねえが、周旋屋の親父がどうでも仕事は仕事、銭は銭。

「よう。どうやらここは平和な里らしいが、流れ者もおこぼれにあずからせちやくねえか。できれば手っ取り早く済ませられるのがいいんだがね」

「それでしたら……」

親父は言いかけ、ぎよつと目を剥いた。なんなんだ？

俺は背後を振り返つて、ああ、と納得した。餓鬼に犬ころまで連れた賞金稼ぎなんざ、そうそうお目にかかるもんじゃねえよな。

「後ろの奴らは気にすんなよ。そこらで行き会つてたまたま一緒になつただけだ」

「はあ……でも、神官様で？」

「まさか。こいつは白装束を着ちやいるが、まだ神官じゃねえ。一人前になるために修行してるところなんだよ」

「それはまた、こんなに幼いのに感心なことだ」

親父は愛想笑いを浮かべ、揉み手でもしそうな様子で小僧の顔色をうかがう。やっぱり気に食わねえ。

「そいつのこたあどうでもいい。こちとら空きっ腹抱えて待つてんだよ、さっさと仕事をよこしやがれ」

苛々して物言いが剣呑になる。くそ、腹が減りすぎて親父の機嫌を取る余裕もありやしねえ。もちもちしたその頬つぺた、むしりつつて食つてやるうか。

俺の心中が分かったのか、親父は慌ててこちらに向き直ると、いそいそと帳面をめくりだした。

「はいはい、失礼致しました。何分この豊平は御霊も妖もとんと出ない所ですからね、神殿の方にもここ数年はまったくお願いすることもないほどです……でもまあ、お困りのようだから、これなんていかがです」

親父は帳面を広げ、俺の方に向けて差し出した。俺はざっと目を通し、妙な顔になる。

「ふーん？ 要するに、この巫師^{ふし}を追い出してくれってことかい」

「ええ、そうです。村外れに住み着いておりましてね、何やら怪しい影やら奇妙な生き物が、その家の近くをうろついているのが薄気味悪くて。とは言つても今のところは格別悪さをするでもないんで、神殿にお願いするほどのことでもありませんし。第一、神官様においで頂くとなつたら、謝礼もかなりのものですから、とてもも「なんで自分たちで追い出さねえんだい。里の衆が皆して鍬持つて脅しをかけりゃ、一発で出て行きそうな気がするがね」

「無茶おつしやらんで下さいよ。あたしらは妖のことも御霊^{みたま}のことも、何も知らんですよ。下手をして怒らせたらどうなるか！ だから皆で金を出し合つて、賞金稼ぎに頼むことにしたんですよ」

親父は大袈裟なほどおびえた顔をして、身震いした。やれやれ、

白けちまう。

「まあな、流れ者だったら祟られようが呪い殺されようが、あんたらは痛くも痒くもねえからな」

「何をおっしゃいますか、そちらさんは妖退治の玄人でしょう？
年寄りの巫師ひとりぐらい、簡単なものでしょうに。ああそうだ、引き受けて頂けるのなら、いくらか前払いしますよ。腹が減っては戦は出来ぬ。そうでしょう？」

痛いところを突いてきやがる。俺は苦笑いするしかなかった。村外れにおとなしく住まってる年寄りを追い出すなんざ、あんまり気持ちのいい仕事じゃねえが、仕方ねえ。こちらら腹と背中がくつきそうなんだ。

「ああ、確かにな。ほかには何もねえんだろ？　引き受けるさ」

てなわけで、俺と小僧は無事、かなり遅い昼飯にありついた。

一膳飯屋はもう店仕舞いをしかけていたが、こういう時は子供と犬ころって取り合わせは激烈によく効く。給仕の女が、俺のことを人買いでも見るように睨みやがったのは、ちと引っ掛かるが、ともかくまあ飯が食えりや何だっといういさ。

「お、来た来た。二日ぶりのまともな飯だ、ありがてえ」

湯気を立てている飯に両手を合わせてから、まずは一口。

「……………？」

おかしいな、こんだけ腹が減ってりや大概のもんは美味しいはずなんだが。まずくはねえんだが、何かこう、足りねえって言うか、妙な味だな。茄子の煮物の方は…………うん、美味い。はて、どういことった？

複雑な顔でもぐもぐ口を動かしつつ、思わずちらっと店の奥を見る。たまたま目が合った給仕の女が、俺の顔を見て眉を逆立てやがった。うへえ、くわばらくわばら。

慌てて飯に向き直って一心に食い、あらかた片付いた頃になって小僧が口をきいた。

「雷火さん」

名前で呼びかけられ、およ、と俺は目をしばたいた。何度もおじさんと言ってはお兄さんと言い直すのが、いよいよ面倒になったってわけか。

「なんだ？」

「俺たちが追い出すっていう、フシって……何？」

おずおずと訊かれ、俺は目を丸くした。

「知らねえのか？ おいおい、冗談だろ。深谷ってのがいかにド田舎でも、一人ぐらいいなかったのか？」

「いなかったよ。神殿でも教わらなかったし」

「はあ……こりやたまげた。まあ、そんな所じゃ巫師がどうのと教えてもしょうがねえよな。そうだな、どう言やあいいか……」

俺は、足元で残り物をがつついていている二匹の犬にちよつと目をやっつてから、もつたいぶつて説明してやった。

「巫師つてのはな、神官とは違うやり方で、妖や御霊を呼び寄せたり操ったりする連中さ。それで人に呪いをかけたり、人の秘密を暴いたり、縁結びや縁切りをしたりするんだ」

「悪い人たちなんだね？」

小僧が眉をひそめたので、俺はますます先輩面をしてそっくり返った。

「まあ大半はそうだな。話の通じねえ恐ろしいジジババばかりだが、皆が皆そうってわけじゃねえ。病や怪我や災難をふっかけることも出来るが、逆のこと、つまり治す方も出来るんだ。ただ神官と違って連中は自分勝手にやってるから、そこんところが厄介なのさ。病を治して貰いに行ったのに、怒らせたなら逆にもっと悪くされるかも知れねえ。道ですれ違ったのに挨拶しなかったら、次の朝には大事な牛が死んでるかも知れねえ」

そこまで言っつて、茶をすすする。小僧は難しそうな顔で考え込んでいた。

「やっぱり悪い人みたいに聞こえるけど」

「悪いこともするが、貧乏人にとつちや重宝でもあるのさ。さつきの親父も言つてたろ、神官は金がかかる、つて。巫師の方がたいていは安上がりなんだ。それに、隣のいけすかねえじじいをぎっくり腰にしてくれとか、村一番の別嬪さんを嫁にしたいとか、そういう頼み事は神官には出来ねえしな」

俺はちよつと意地の悪い気分になつて、にやにやしなから言つた。はてさて、神殿育ちの純真な小僧がどんな反応をするものやら。

ところが小僧が言つたことときたら、俺の予想とはてんで違つていた。

「でもこの村では、気味が悪いから追い出そつて言つんだね。しかも自分たちでするんじゃないに、よそ者にやらせようとしてる。なんだか嫌な感じだなあ」

おおよ。こりや驚いたね。俺はとつさに何と言つたら良いものか分からず、馬鹿みたいにぽかんと口を開けて絶句した。真理の名前は伊達じゃねえつてことらしい。

俺がまじまじと見ているのに気付き、小僧は顔を上げて「なに」と不審げに眉を寄せた。ちよいとばかり照れもまじつていたかも知れない。

「いやあ、おまえさん、世間知らずかと思いきや、なかなか言つじやねえか」

「えっ……俺、何か変なこと言つた？」

途端に小僧は赤くなる。俺はにやつとして身を屈め、小僧に耳打ちした。

「いや、この仕事に気が食わねえのは俺も同じさ。でもそれは、村中じゃ黙つてな」

それから俺はまた体を起こし、やれやれとこれ見よがしに伸びをしてから、楊枝で歯をせせつた。小僧は複雑な顔で俺を眺めていたが、やがてその目を楊枝入れに移し、おもむろに一本抜いて俺の真似を始めやがった。

「おいおい、やめとけよ。神官になろうつてえ奴が下衆な癖をつけ

「ちや困るぜ」

「そうなの？」

きよとんとして問い返し、小僧は楊枝を前歯で挟んでぶらぶらさせる。何やってんだ、こいつは。俺は苦笑してその楊枝を取り上げ、空になった茶碗に放りこんだ。

「それより、おまえのことを聞かせろよ。何か探してるってっただよな。何なんだ？」

俺の質問に、すぐには返事がなかった。小僧は目を伏せて、未練がましく楊枝を見ているふりをしたが、しばらくしてようやくぽつりと答えた。

「しるし」

「あ？」

「しるしを探してるんだ。一人前になる前に、誰もが自分だけの『しるし』を見付けなきゃいけないんだって。それが何なのかは人によって様々だけど、見れば必ず、それが自分の『しるし』だと分かる。だから、どこにあるどんな物かは、誰にも教えることは出来ないんだってさ」

「……何だそりゃ。んじゃ何か、『これだ！』って閃くまで、いつまでもどこまでも探し続けなきゃならねえってことか？ だったらそこらで適当なもの見繕って帰ったって、バレねえんじゃねえのかい」

神官のやることあよく分からん。呆れた俺に、小僧は真剣な顔で首を振った。

「そういう問題じゃないんだ。法術や剣術を修めても、『しるし』を見付けなきゃ、自分を守ってくれる一番大事な力が得られないんだって」

「へーえ。普通はどういうものなんだ？」

「よく知らないんだ。深谷には戦士がいなかったから」

「明師さんは、妖退治はしねえのか」

「儀式で被えるものなら退治するよ。でも武器や法術で戦うのは、

法部の人。法師とか戦士とかね。俺はまだ侍士^{じし}だけど。『しるし』はね、時々来て下さった羽山の法師様の話だと、鴉や犬みたいな動物だったり、草木や川だったりするんだって。太陽や月をしるしに持つ人は、ものすごく強いらしいよ」

話が戦士のことになった途端、嬉しそうによくまあしゃべること。それだけ憧れてるってことなんだろうなあ。その笑顔があんまり無邪気なもんで、俺は、胸に浮かんだ疑問はどこぞへ蹴っ飛ばして、別の事を口にした。

「おまえのも、何か格好いい『しるし』だといいな。何たって名前が真理なんだ、それに見合うのでなきゃな」

「俺は別に、蟻とか石でもいいんだけどね」

照れたように言いながらも、真理は期待に目を輝かせている。だから俺は言い出せなかった。

おまえみたいな小せえ子供が、もう一人前になるための『しるし』探しに出されるもんなのか、とか。

誰も深谷の名前を聞いたことがねえような遠い土地まで来なきゃ、『しるし』ってのは見付からねえもんなのか、とか。

そついうことは、訊いちゃいけねえ気がした。

三 初仕事(1)

三

腹ごしらえを済ませて一休みした後、俺と小僧は連れ立って村外れへ向かった。もちろん、白黒のわんころどもも一緒だ。

巫師の住み着いたあばら家つてのは、田圃の間を走る小川に沿って、ずっと川上へ行ったところにあるって話だったが、途中やたらと二匹の犬があちこち嗅ぎ回るんで、はかどらねえつたらありやしねえ。日が暮れる前にやつつけちまいてえのに、人間様の都合なんざお構いなした。

田圃にはちょうど水が張ってある時期で、稲の青々とした葉が風にそよいでいる。世話が行き届いていると見えて、何だか偽物臭えぐらいにきれいだ。川つぺりにはぼつぽつと若木が植えられていたりして、趣もある。しかし、あいにくこちら風流とは縁遠い流れ者だ。わんころに付き合っつて、田圃を見ながら歌を詠むつてわけにもいかねえ。

「おい真理、この白黒兄弟、もちつときちんとしつけとけよ。道草ばつか食いやがって」

「何かが気になるんだよ」

答えた小僧も落ち着かない様子で、辺りを窺っている。

「何かつて、何が」

「分からない。でも、この村は変だつて気がする」

「おまえ、ほかの村を見たことあるのか？」

思わずそう言った俺に、小僧はいつちよまえにムツとした顔を向けた。

「そういう意味じゃなくて」

「ああ、分かった、分かつてる。悪かった」

俺は慌てて手を挙げ、小僧を遮った。やれやれ、冗談が通じねえ

なあ。俺は足を止めてため息をつき、草むらでふんふんやってるわんころどもを見やった。

「確かにな、この村はどことなく妙な空気が流れてる。それは俺も同感だよ。このぐらいの村になりゃ、人里に群がる小物の妖がちらほらしてるもんだ。神殿がすぐ近くにある場合は別だが、この神殿はどうやらちよいと遠いようだし、そこらに何か飛んでたつておかしかねえ。だがさつぱり見当たらねえとなると、村全体によつぽど強力なまじないでもかけてあるのか、その村外れの巫師がこの辺の妖を一匹残らず呼び集めてるのか……」

曖昧に言葉を濁した俺に代わって、小僧が偉そうに締めくくった。
「何にしる油断は禁物、だね」

生意気な。そりゃ俺の台詞だつつの。とは思えど、それを口に出しちゃ大人気ねえ。

「そーゆーこつた」

それだけ言つて、ぺしんと軽く小僧の頭をはたいてやった。

「おら行くぞわんころども。さつさと片付けて財布にも餌をやらねえと、また野宿になつちまうぞ。おまえらは地べたで良くてもな、人間様はたまにや布団で寝たいんだ」

白黒二匹を急ぎ立てながら、さらに小川沿いの道を進む。田圃が途切れて人影もなくなった辺りで、ようやく目指す小屋が見付かった。どうやら水車小屋だったらしいが、ぶつ壊れちまつてるのは遠目にも分かった。茅葺き屋根にペンペン草が生えてらあ。

「ふーむ……見たとこ、特に変なもんはいねえな」

ちよいと手前で立ち止まり、とっくり小屋を眺めてみる。妖の姿はちらとも見えねえし、御霊の影もねえ。周旋屋の親父が言つた様子とは、ちと違うんじゃないか？

「しかし何だね、嫌な感じがしやるよ」

無意識に手がうなじをさすっていた。妖にしる御霊にしる、性質の悪いのがいやがる時は、ここら辺がムズムズする。今もそうだ。横を見ると、小僧は打って変わって真剣な顔つきになっていた。

二匹の犬はそれぞれ小屋を睨み、喉の奥で小さく唸っている。どうやら、こいつらにも分かるらしい。

「とりあえず、俺が様子を見るからな。おまえらは下がってるよ」「餓鬼とわんころろに先陣を切らせるわけにゃいかねえ。俺は用心しいしい小屋に近付き、まだ明るいのいきつちり閉ざされた戸を叩いた。

「おい、誰かいるか」

バンバン。てのひらで二回。返事はない。

「いるんだろ。巫師のじいさんよ」

ドンドンドン。拳で三回、叩き終わるや否や、ゴトリと戸が開いた。隙間から覗いたご面相に、俺はぎよっとなって後ずさる。シミと皺だらけの、病葉^{わくらは}みてえな皮が骸骨にへばりついた、なんとも化け物じみた顔だ。目ん玉は白く濁っていたが、それでも俺が見えるのか、ぎよろりとこつちを睨んでやがる。戸を開けた手はまるつきり枯れ枝みてえだ。

「よう。村の周旋屋でちよいと頼まれてな」

なんとか俺がそう言った途端、犬どもがワンワン吠えだした。くそ、うるせえぞ！ 気が散るじゃねえか。

じじいは瞬きもせず俺を見つめたまま、ゆっくり首を傾げた。そのままぼろつと首がもげちまいそうだ。うへえ。俺はゆがめた顔をごまかそうと咳払いして、言っても無駄だと予感しながら言葉を続けた。

「あんたが何をしたか知らねえが、村の連中はあんたがいるだけで不気味なんだよ。ここからあんたを追い出してくれって頼まれたんだ」

「わしゃあ……出て、行かん……ぞあ」

嘎れた声が、じじいの喉から隙間風よろしく漏れてくる。今にも死にそうな声のくせに、目だけはぎらぎらして、おっかねえっとならぬいぜ。

「そうは言ってもな、こんなとこに住んでたって、あんた何にもい

い事はねえだろう。村人に嫌われてるんじゃ、客も来ねえんだし……って、ああもう、ワンワンうるせえな！」

俺が後ろをちらっと見て舌打ちしたと同時に、じじいがにたあつと笑った。

「村の衆はあ、親切じゃで、な」

「何？ まさか」

やべえ！ 背筋に冷たいものが走り、俺は反射的に大きく飛びすさった。

入れ替わりに白と黒の影がさつと前へ飛び出し、じじいに躍りかかる。その瞬間、じじいの体が音を立てて破裂した。

「うわッ！」

固いものに突き飛ばされ、俺はぶざまにひっくり返った。ギャンッ、とわんころの悲鳴が聞こえる。ちくしょう、何がどうなってんだ！？

頭を振って起き上がるうとしたが、俺の体はでけえ木の根っこにがっちり押さえ込まれていた。なんなんだ、くそ！ 月華を抜こうにも手が動かさねえ。じたばたしていると、根っこに見えたものが、ナメクジみたいにくにやりと動いた。

「いつてえ！ くそおッ、離しやがれ化け物め、この……うげ！」
暴れると、根っこもどきがますます強く締め付けてきやがった。

無数の細い管が伸びて俺の体にはりつき、次々にブスリと突き刺さる。俺を針山にする気かよ！

その瞬間、俺の目の前にぬつと何かが現れた。

と思つたら黒鉄だ。化け物の根っこに食らいつき、牙を突き立てる。途端に化け物は、釣り上げられた魚よろしくビチビチ跳ねて、俺を離れた。しめた！

隙を逃さず素早く立ち上がり、月華を抜く。巨大な根っこは犬を振り落とそうと暴れまくっていたが、黒鉄の奴はがっちり食らいついたままだ。いいぞ、やるじゃねえか。

「今度はこっちの番だ、よくもやりやあがったな！」

俺は月華を振りかぶり、のたうつ木の根に斬りつけた。感触は確かに生木だったが、傷口からは赤黒い血が噴き出し、根っこは大慌てでズルズル下がって行く。黒鉄がようやく奴を離し、俺のところへ駆けってきた。

「助かったぜ、ありがとよ」

まずはわんころに礼を言ってから、俺はようやく何がどうなっているのかを見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

昏い道連れ

2011年11月21日23時50分発行